

文化財を活かした小学校における ESD 社会科創出の一方法

－ 小学校 4 年生社会科「県内の文化財や年中行事」の実践から －

新宮 済

(奈良市立平城小学校)

中澤 静男

(奈良教育大学 ESD・SDGs センター)

A Method of Creating ESD-Social Studies in Elementary School Utilizing Cultural Properties:
Based on the Practice of Grade 4 Elementary School Social Studies “Cultural Properties and Annual Events within
the Prefecture”

Wataru ARAMIYA

(Heijyou Elementary school)

Shizuo NAKAZAWA

(Center for ESD and SDGs, Nara University of Education)

要旨：平成 29 年 3 月に公示された学習指導要領をもとに、令和 4 年 1 月に小学校 4 年生の「県内の文化財や年中行事」の単元開発を実践した。授業では、中澤静男 (2021) の「歴史文化遺産が語る持続可能な社会づくりの必須条件」を手掛かりに、持続可能な開発目標 (SDGs) の関連に着目することで、歴史理解と文化財の保存・継承にとどまらない、持続可能な社会の条件やそのために必要な市民参画を考え、SDGs の達成に貢献する価値観への転換と行動化を促す授業展開を試みた。本稿では、教科書の学習内容の検討をもとにして単元「東大寺の大仏が語る SDGs」を開発実施し、学習指導要領前文と解説に新たに加えられた、持続可能な社会づくりを担おうとする態度を養うことも視野に入れた小学校における ESD 社会科を提案する。

キーワード：ESD 社会科 ESD-Social Studies

文化財 cultural property

東大寺大仏 Great Buddha of Todaiji Temple

1. はじめに

2015 年 9 月の国連総会では、「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」が採択され、「持続可能な開発目標 (SDGs)」を掲げた。これは、「誰一人取り残さない」のスローガンの下、2030 年までに発展途上国のみならず先進国も含む世界全体が達成すべきグローバルな目標として、17 の目標と 169 のターゲットから構成されている。日本においても、政府や自治体、企業や研究機関が SDGs を掲げ普及活動に取り組んできた努力により、SDGs に関する認知度の高まりが伺える。しかしながら、企業のホームページを管見するかぎり次のステップである行動化に進まず SDGs を理解することだけに留まり、SDGs のロゴを添付し社会に示すことに終始している企業も多々見受けられる。SDGs の目標は 2030 アジェンダの名称にもあるように「我々の世界を変革すること」である。我が国は、持続可能な社

会づくりに向けて社会変革を目指し、一人ひとりのライフスタイルの変革を喚起して SDGs の達成に貢献していく行動化を促していかなければならない。これからは SDGs の理解を深めていくだけではなく、SDGs の達成に向けて能動的に参加・参画していくことが必要なのである。

2. 研究の目的

小学校学習指導要領解説社会科編 (平成 20 年公表) の第 3・4 学年の内容「イ 地域の人々が受け継いできた文化財や年中行事」の内容の取扱いでは「生活の安定と向上に対する地域の人々の願いや保存・継承するための工夫や努力を考えることができるようにすることが大切である」となっており、文化財や年中行事、いわゆる有形・無形文化財についての人々の願いや保存・継承することを考えることに重点が置かれていた。

一方で現行の小学校学習指導要領解説社会科編 (平成

29年公表)には、「(4) 県内の伝統や文化、先人の働きについて、学習問題を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する」とあり、知識・技能として「ア(ア) 県内の文化財や年中行事は、地域の人々が受け継いできたことや、それらには地域の発展など人々の様々な願いが込められていることを理解すること」と記されている。両者に共通している点は、文化財や年中行事を受け継いでいくために人々の願いが重視されていることや、保存・継承するための工夫や努力を考えていることである。

また平成29年度版では思考力・判断力・表現力として、「イ(イ) 歴史的背景や現在に至る経過、保存や継承のための取り組みなどに着目して、県内の文化財や年中行事の様子を捉え、人々の願いや努力を考え、表現すること」と記載されている。当時の人々の思いや願いと保存・継承に向けての工夫や努力などを調べることから、県内の文化財を受け継いでいくことについて考える学習に重点が置かれていることがわかる。

さらに、学びに向かう力、人間性等において、内容の取り扱い(3)の解説として、「地域の伝統や文化を保護したり継承したりするために自分たちが協力できることを考えたり選択・判断したりして、地域に対する誇りや持続可能な社会を担おうとする態度を養うよう配慮することが大切である」という点も明記されている。

自分ができることを選択・判断する学習を取り入れることで、地域の文化財の保存・継承をより自分事として捉える学習に発展している。また、持続可能な社会づくりを担おうとする態度も養うような配慮が大切であると記載されていることに注目したい。これは、学習指導要領前文に持続可能な社会づくりの視点が組み込まれており、持続可能な社会の創り手の育成が社会科の授業づくりにおいて基盤となる考え方となったからである。しかしながら、解説では、持続可能な社会づくりを担おうとする態度を育む具体的な方法として、「伝統や文化を創造する観点から、地域社会の発展への願いを基に新しく生まれた祭りなどに触れる」などの記載はあるものの、文化財に関しては触れられていない。文化財を教材にすることで持続可能な社会づくりに参加・参画するような学習の開発が期待されているのか大いに疑問である。

学習で焦点を当てるべきは、地域の文化財を通して持続可能な社会づくりを考えることであり、SDGsとつなげ行動化を促すことで、社会に参画していくような態度を育む展開が必要と考える。しかし、現在学校現場で実践されている社会科「県内の文化財や年中行事」の単元においては、持続可能な社会づくりを視野にいたした学習展開の実践は少ない。学習指導要領の前文には、「持続可能な社会の創り手」の育成が求められているが、社会科の目標を見ると「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎」の育成を目標とするに

とどまっており、持続可能な社会の創り手の育成までは求めている。一方、文科省(2018)は持続可能な社会づくりの担い手を育む教育をESDと定義している。ESDを研究する中澤(2021)は、「ESDは社会づくりに関する人々の価値観と行動の変革を促すことで、結果として持続可能な社会の実現を図る教育」と述べている。そこで、前述した社会科の目標にとどまらず地球市民としてSDGsの目標の達成に貢献する行動の変革を促し、持続可能な社会づくりに参加・参画するようになる態度を育む学習を小学校におけるESD社会科と定義する。

本研究では、「県内の文化財や年中行事」を題材にSDGsの達成に向けて行動の変容につなげていながら、持続可能な社会の創り手としての参画を促す小学校におけるESD社会科の一単元開発について提案することにしたい。なお本稿でいう文化財とは、学習指導要領で述べられている「文化財については、文化財保護法でいう文化財」と同じように捉えている。文化財保護法では文化財を有形文化財・無形文化財・民俗文化財・記念物・文化的景観・伝統的建造物群の6種類に分けて定義している。

3. 研究の方法

本研究では、持続可能な社会の創り手を担おうとする態度を養い、さらに、小学校におけるESD社会科としてのSDGsへの参画を促す単元を開発することを目的に授業実践するにあたり、2つの検討を行った。

1つ目に、社会科教科書における「県内の文化財や年中行事」の単元の内容について、田淵・中澤(2007)の「ESDを視野に入れた世界遺産教育」を援用し検討した。世界遺産教育を取り入れる理由は後述する。

2つ目に、奈良県教育委員会奈良県小学校教科等研究会社会科部会の報告書に記載されている「県内の文化財や年中行事」の授業実践と、奈良市で行われている世界遺産学習の実践の内容を検討した。これらの実践を検討した理由として、前者は、筆者が本研究会に所属しているため、過去10年間の一自治体における授業研究を容易に集めることができ、前述した指導要領前文「持続可能な社会の創り手」の浸透を検証できるからである。後者は、これまでESDとして実践されてきた世界遺産教育の先行事例であり、分析することでESDの質を高める要素を見つけられると考えたからである。

これらをもとに中澤(2021)の「歴史文化遺産が示す持続可能な必須条件」を援用して、単元開発をし授業実践を行った。中澤が示した、文化財のもつ持続可能性や持続可能な開発目標との関連を単元に取り入れることは、これまで行われてきた実践のなかで先駆性があり、さらに社会参画を促す小学校におけるESD社会科として効果があると考えられるからである。

4. 教科書内容と実践の検討

4.1. 世界遺産教育の概念の検討と ESD の関連

これまでの実践と ESD の関わりを検討していくために、奈良市の世界遺産学習を牽引してきた田淵・中澤 (2007) の世界遺産教育の概念を参考とする。

ユネスコが進める世界遺産教育について田淵 (2011) は、「世界遺産の価値に気づき、大切に保存しようとする態度、未来に伝える義務があるという責任感、そのために何ができるかという実践的なスキルなど、総合的な教育」と説明している。つまり、世界遺産についての知識を身につける学習が重要視されるのではなく、地域にある世界遺産を教材にして、当時の願いや世界遺産の保全に関わる人の営みを学び、世界遺産を未来に伝える行動を起こす学習が重要であると考えている。世界遺産は、文化遺産、自然遺産、文化遺産と自然遺産の両方を兼ね備えた複合遺産の3つの種類がある。ユネスコが進める世界遺産教育の推進を図る田淵・中澤 (2007) は、これらの全てを対象に教材化を提案している。

本実践では、地域の文化財を学ぶにあたり、世界遺産教育の考え方を援用することを検討している。その理由は2つある。

1つ目に、世界遺産教育は ESD と関連性が高いからである。田淵・中澤 (2007) は、ユネスコが推進している ESD と世界遺産教育は、どちらも固有の目的と教育内容があり、学習方法も異なっているが、ESD のツールとして世界遺産教育を実践すれば、子どもにより切実さをもたせ、興味関心につながり充実した学習になると述べていて、ESD と世界遺産教育の連携関係を説明している。

2つ目に、田淵・中澤 (2007) は、「世界遺産がない地域でも、世界遺産教育は可能なことである」と言及している。文化財や自然環境はどの地域にも存在しており、これらを教材にして、その価値に気づかせ、地域へのアイデンティティを育む授業が可能であるからである。つまり、教材が世界遺産でなくても、地域の優れた文化財や自然環境から世界遺産教育と同じような学習ができるため、世界遺産教育の研究成果を地域の文化財の教材化に活用することで、どの地域の文化財でも ESD の実践が可能となる。

田淵 (2007) は、世界遺産教育の概念を次の3つに分類している。①「世界遺産についての教育」、②「世界遺産のための教育」、③「世界遺産を通しての教育」とし、そのなかで説明された具体的な内容を、筆者が表1に整理した。注目すべき点は、③「世界遺産を通しての教育」である。中澤 (2021) は、①を「知識理解が中心となる教育」、②を「世界遺産の保全・保護のための教育」、③を「世界遺産を通じた ESD」と説明している。これらの概念的枠組みを用いて平成27年度版と現行の教科書

の学習展開を検討していく。

4.2. 教科書における ESD の関連についての検討

先述した世界遺産教育の概念的枠組みを用いて、小学校社会科の教科書平成27年度版と現行の令和3年度版を検討し、表1に整理した。

表1 田淵・中澤 (2007) 「世界遺産教育の概念的枠組み」にもとにした教科書の記載の検討 (筆者作成)

	田淵・中澤 (2007) 「世界遺産教育の概念」	27年度版	27年度版	27年度版	27年度版
		A社 【教材】 道後温泉 本館	B社 【教材】 大石神社	C社 【教材】 とちぎ秋 祭り山車	D社 【教材】 舞岡ばやし
	具体的な学習 (筆者が「世界遺産」を 「文化財」に置き変えて作 成)	現行 A社 【教材】 道後温泉 本館	現行 B社 【教材】 阿波人形 浄瑠璃	現行 C社 【教材】 大浦天主 堂	D社 現行版は 出版して いない
「世界遺産につ いての教育」	・文化財についての知識や その価値に気づかせる	○	×	×	○
		○	○	○	△
「世界遺産のた めの教育」	・文化財をめぐる問題点に ついて理解する	×	×	○	○
		○	○	○	△
「世界遺産を通 しての教育」	・文化財を切り口に、平 和や文化の多様性や社会的 公正の意義、地球環境の保 護などを学ぶ	×	×	×	×
		×	×	△	△

教科書を検討する理由は、新宮・中澤 (2020) で述べたように、学校教育法第三十四条に「小学校においては、文部科学大臣の検定を経た教科用図書又は文部科学省が著作の名義を有する教科用図書を使用しなければならない」と明記されている通り、小学校では教科書を主たる教材としていることから、教科書を検討することで全国で実施されている「県内の文化財や年中行事」の学習に関する動向を伺うことができると考える。ここでは特に学習指導要領前文の「持続可能な社会の創り手」の育成の視点が、反映されているか確認する。

ただし、平成27年度版は3年生、現行は4年生を検討している。学習指導要領 (平成20年告示) は「県内の文化財や年中行事」を3年生および4年生で学習することになっているが、現行では4年生の学習となっているからである。学習指導要領 (平成29年告示) の「県内の文化財や年中行事」は小学校第4学年の教科書に掲載されていた。検討した平成27年度版教科書は、日本文教出版株式会社の「小学社会」と東京書籍株式会社の「新編 新しい社会」、教育出版株式会社の「小学社会」、

光村図書出版株式会社の「社会」の4社である。現在小学校第4学年で使用されている現行の教科書は、日本文教出版株式会社の「小学社会」と東京書籍株式会社の「新しい社会」、教育出版株式会社の「小学社会」の3社である。

表1では先にあげた理由から、以下の2項目を筆者が書き換えている。「具体的な学習」では、田渕・中澤(2007)は「世界遺産」に絞って説明していたが、「文化財」に筆者が言葉を置き換えている。

さらに田渕・中澤(2007)は「世界遺産についての教育」の具体的な学習として、世界遺産をめぐる問題について理解する学習と紹介していたが、そのような学習は世界遺産について知識理解を学習するというよりも、世界遺産の保全のための学習に近いと筆者は考えるので、「世界遺産のための学習」に入れ替えた。以下、平成27年度版教科書と現行教科書とを世界遺産教育の概念的枠組みをもとに検討していく。

はじめに、「世界遺産についての教育」の категория に関してである。平成27年度版と現行教科書の全てに共通しているのは、「文化財」という用語の紹介や部分名称、継続してきた年数等であり、文化財の価値よりも、用語といった文化財の事実に重点が置かれていた。平成27年度版ではC社とD社の教科書に、現行教科書ではA社の教科書で、文化財が造られたときの願いを記載しているが、文化財がつけられた当時の人々の思いや願いについての調べ学習の取扱い方が十分になされていない。深く調べることで、文化財にこめられた願いと環境問題や国際問題などの共通点が見つかりやすくなり、さらに現代課題とつなげることができる。文化財がつけられた思いや願いに重点を置くことで、「世界遺産を通しての教育」へ発展が可能である。

次に「世界遺産のための教育」の categoria に関してである。平成27年度版のB社、C社、D社の教科書では、祭りの復活事例を紹介することで、継承することの問題点に気づくことができる記載となっていた。現行教科書では文化財をめぐる問題点を直接紹介するような記述は見られないが、老朽化や戦争によって壊れた事実を記載することで、文化財をめぐる問題点に気づけるようにはなっていた。平成27年度版と現行教科書に共通するのは、ゲストティーチャーを活用して保存・継承に関わる人の営みを調べる記載があったことである。人の営みを学び、あこがれることが、世界遺産教育で育まれる態度と合致しており、文化財を保存・継承をしようとする態度を育てることができるからである。教科書が学習方法を提示するという意味で、インタビューが全ての教科書に載せられていることは評価できる。ただし残念なことに、インタビューだけの記載からでは、ゲストティーチャーの活動を簡単に紹介するだけで、その人の思いや願いや生き方が記載されていない。これだけでは、子どもがゲストティーチャーにあこがれるには不十分であ

り、あこがれたゲストティーチャーと同じように、地域の文化財を守っていこうとする意志が育つことにつなげられないと考える。ESDは、学習者の価値観と行動の変革を促す教育であり、人の営みにあこがれることで、そのような生き方や活動に参加したいと思い、行動を起こす子どもを育てることができることから、人物と出会い、生き方や思いについてのインタビューを重視している。

最後に「世界遺産を通しての教育」であるが、平成27年度版では、文化財を切り口に文化の多様性、国際交流、環境問題などを考えるような展開の記載は、どの教科書においても見られない。一方で現行教科書では、C社の教科書において、「わたしたちのまちに残る古い建物」として長崎の大浦天主堂を教材にしており、「世界遺産を通しての教育」の可能性もあると言える。大浦天主堂がどうして大切にされてきたかを学習問題として設定していることは評価できる。しかし、創建当初キリスト教が禁止されていた背景や、原爆で壊れた大浦天主堂が修復されたことを年表に記載するだけで、大浦天主堂という文化財を切り口にして平和について考えたり、文化の多様性について考えたりする内容にはなっていない。さらに、大浦天主堂が創建された当時の思いや願いに触れているものの、重要視されているようには思えない。また、他社の教科書は、世界遺産を通しての教育に該当する内容は見られなかった。

平成27年度版教科書と現行教科書を分析して見えてきたことをまとめる。「世界遺産についての教育」の視点で考えると、両者ともに用語や時期などを知る学習にはなっているが、文化財ができた当時の思いや願いを文化財の価値として理解していく展開にはなっていない。「世界遺産のための教育」の視点で考えると、文化財に関わる問題や、保存・継承についての人々の努力についての記載があり、重視されてきたことがわかるが、人の営みにあこがれをもち行動を喚起する展開にはなっていない。「世界遺産を通しての教育」の視点で考えると、不十分ながらC社の内容に関連するものが見られ、ESDとして展開できる可能性が伺えた。しかし、創建当初の願いや文化財を持続するためのシステムを調べ、ESDとして持続可能な社会づくりの関連性について踏み込んで探究していく内容にはなっていない。持続可能な社会づくりに参加・参画しようとする意欲や態度の育成を促すような学習の工夫、人の営みにあこがれる学習内容の創出が必要である。それには、学習で取り上げる「世界遺産を通しての教育」の該当する学習内容の精選と、あこがれをもたらすようなゲストティーチャーを効果的に活用した学習展開が求められる。

4.3. 奈良県の実践とESDの関連についての検討

奈良県教育委員会奈良県小学校教科等研究会社会科部会の実践報告書に記載された「県内の文化財や年中行事」に関する3年生及び4年生の実践について分析を行っ

たのが表2である。新学習指導要領が施行されるまでは3年生及び4年生でこの単元が学習されていたので、どちらの学年も抽出した。

表 2 奈良県教育委員会奈良県小学校教科等研究会社会科部会県大会における「県内の文化財」実践報告の分析

大会	日時	学年	単元 (一部省略)
第55回奈良県大会	2008年11月18日	3	スーパーマーケット
		4	シカとともに生きる奈良の町
第56回奈良県大会	2009年11月10日	3	ものをつくる人びとのしごと
		4	なくそうこわい火事
第57回奈良県大会	2010年11月4日	3	ものをつくる人びとのしごと
		4	ふせごう交通事故や事件
第58回奈良県大会 第58回近畿大会	2011年11月18日	3	店ではたらく人びとのしごと
		3	昔のくらしと道具
		4	大正区の発展につくした人びと
		4	なくそうこわい火事
第59回奈良県大会	2012年11月6日	3	はたらく人々
		4	地域の発展につくした人々
第60回奈良県大会	2013年11月8日	3	店ではたらく人びとのしごと
		4	地域の発展につくした人々
第61回奈良県大会	2014年11月11日	3	地域に受け継がれる文化財 受け継がれる大柳生太鼓踊り
		4	水害からくらしを守る
平成26年度冬季研究大会	2015年2月10日	3	お店ではたらく人々
		4	シカとともに生きる奈良の町
第62回奈良県大会	2015年11月27日	3	お店ではたらく人々
		4	くらしとごみ
平成27年度冬季研究大会	2016年2月12日	3	工場ではたらく人々
		4	なくそうこわい火事
第63回奈良県大会	2016年11月25日	3	昔の道具と昔のくらし
		4	水害からくらしを守る
平成28年度冬季研究大会	2017年2月17日	3	わたしたちのまちのようす
		4	地域の発展につくした人々
第64回奈良県大会 第55回全国小学校社会科研究協議会研究大会と同時開催	2017年10月26日	3	複式指導のあり方
		3	まちではたらく人々
		3	まちではたらく人々
		3	わたしたちのまちのようす
		3	草津ではたらく人とわたし
		3	はたらく人とわたしたちのくらし
		3	西大寺にあるお店のひみつ
		3	社会を拓こうとする社会科
		3	店ではたらく人びとのしごと
		3	店ではたらく人びとのしごと
		3	自ら考え、共に学ぶ社会科
		3	まちではたらく人びと
		4	下水処理と利用
		4	水害からくらしを守る
		4	わたしたちの県
		4	グローブづくりの町 三宅町
		4	特色ある地域の人々のくらし
		4	地震からくらしを守る人びと
		4	地域の発展に尽くした人
		4	ごみのゆくえと私たちのくらし
4	水害からくらしを守る		
4	特産品からみる岩国の発展		
4	横浜の水道づくり		
4	水害からくらしを守る		
平成29年度冬季研究大会	2018年2月16日	3	昔の道具
		4	日本一の柿のまち 五條市
第65回奈良県大会	2018年11月22日	3	市で作れ出されるもの
		4	水害からくらしを守る
平成30年度冬季研究大会	2019年2月19日	3	お店ではたらく人々
		4	地域の発展につくした人々
第66回奈良県大会	2019年11月8日	3	ふせごう交通事故や事件
		4	金魚のまち 大和郡山市
令和元年度冬季研究大会	2020年2月14日	3	工場ではたらく人々
		4	自然災害から人々を守る
令和2年度冬季大会	2021年2月9日	4	自然災害から人々を守る

2008年から2021年までの報告書において「県内の文化財」に関する実践は、第61回奈良県大会の奈良市立興東小学校の1件のみであった。「地域に受け継がれる文化財 - 受け継がれる大柳生太鼓踊り -」の実践は、約600年間受け継がれてきたとされる奈良県指定無形民俗文化財の大柳生太鼓踊りを教材化している。はじめに、地域の人々が受け継いできた太鼓踊りの様子や人々の願いを人の営みから学んだ過程のなかで、太鼓踊りが休止になった事実を知り、その理由をもとに自分たちはどのように復活させるかを考え話し合っている。

その後、太鼓踊りを伝えていくためにはどうしたらよいか自分たちに出来ることを考え、新聞やチラシにして紹介している。この実践を田淵・中澤(2007)の世界遺産教育の概念的枠組みの視点で分析する。本実践では太鼓踊りの思いや願いを探究していくことで、文化財についての知識やその価値に気づかせているので、「世界遺産についての教育」に該当している。休止の事実から復活させるために地域の方と話し合っていくことで、文化財をめぐる問題への理解や、文化財に関わる態度に焦点を当てて学習が進められているので「世界遺産のための教育」にも該当している。しかし、太鼓踊りを切り口に持続可能な社会づくりを考え行動するような展開にはなっていなかった。学習展開の後半で、太鼓踊りが休止ではあるが終了でないことや、踊りの良さを伝えるチラシや新聞を作成しているが、子どもの社会参画までは生まれていなかった。思いや願いを教師が教材研究していくなかで、文化財がもつ思いや願いが現代社会の課題とどうつながるかを考える視点が必要である。また、持続可能な社会づくりを考える態度を養うためには、踊りの継承に子どもが参加・参画していくことが大切であり、そのためには学習において社会参画を促す展開をつくる必要があったらうと考える。

4.4. 世界遺産教育とESDの関連についての検討

これまで県内で行われたESDと関わり深い世界遺産教育の実践から検討していく。奈良市では市内すべての学校で世界遺産学習が実施されている。多くの学校で「世界遺産を通しての教育」の実践は行われている。そのなかでも注目すべきは、奈良市教育委員会・奈良教育大学が主催した平成20年度第1回奈良市世界遺産学習実践研究大会で実践発表された、奈良市立済美小学校と奈良市立平城西小学校の実践である。

1つ目に、済美小学校の総合的な学習の時間「『世界遺産のあるまち奈良』の『もの・こと・人』から - 自分たちの住む地域のよさやこれからの自分の生き方を考える -」について紹介する。子どもたちが普段から見たり触れたりするもののなかには、地域に誇ることが出来る「もの・こと・人」が数多くあることに気づき、地域を愛し、その中で自分がどのようによりよく生きていくかを深く考える学習である。江戸時代に奈良の名所図絵

や名所案内記に描かれた、奈良の美しい景色とそれにとけこむ風物を選び名付けた「南都八景」を教材にして、地域の文化財などの自由研究を進め発表会を行っている。さらに、クラスで現代版「新南都八景」を創り地域に紹介していくなかで、残していきたい風景を守っていくことの大切さに気づいている。次の学習として教師からの「危機遺産」の話をもとに、文化財と戦争・平和、環境汚染、保存継承問題、都市の開発について考えている。最後に世界遺産に限らず、地域の文化財を大切にしたり、自分たちがよりよく生きていくことについて考えている。この実践は、今も済美小学校で引き継がれているESDであり、ESDの実践が少なかった当時としては先駆的な実践として高く評価できる。しかし、今も続けられている実践として考えるのであれば、ESDとしてさらに文化財と現代課題をつなげたり、持続可能な社会づくりを目指し、考えたり行動したりする学習も取り入れてもよいと考える。そのような視点から、この実践は持続可能な社会づくりに参加・参画していこうとする態度の育成をさらに高めることができる余地が残されていると考える。

2つ目に、奈良市立平城西小学校の総合的な学習の時間「世界遺産から平和を考えよう - 東大寺の大仏と原爆ドームから -」について紹介する。6年生の平和学習で訪れる原爆ドームと東大寺の大仏に焦点を当てて、両者に込められた願いを探ることで、平和の大切さを自分事として考え、心のなかに平和の砦を築いていく。最後の学習展開として、世界遺産から未来を考える学習が行われている。ここでは大仏造立の詔を紹介し、東大寺の大仏造立に込められた聖武天皇の願いと、広島原爆ドーム保存に込められた願いを比べ、両者から全ての動植物が幸せに生きることができる平和な世界の創造という願いが込められていること、さらに多くの人々の小さな力を集めて保存・復興を行ってきたことを学ぶ。それらを通して、平和についても自分たち一人ひとりの力を集めることが大切であることに気づいている。さらに、平和に向けて参加・参画していこうと考えることが生まれたことはESDとして効果が高められたと考える。しかし、具体的な行動化については弱さがあった。この実践は先にあげた実践と違い、平城西小学校では継続していない。その理由は、本実践では東大寺造立の願いを探究し、これを切り口にして平和について考えていたこと、さらに大仏復興にみられた市民の参加・参画を、自分たちが平和のためにできることとして考えたからである。これは田淵・中澤(2007)の「世界遺産を通して学習」のモデルとなるような学習であり、全国で再現可能な授業展開として先駆性があった。しかしながら、田淵・中澤の研究が学校現場で周知されていないこともあり、現場では実践を再現するのに時間がかかっている。

以上2つの実践を検討してきたが、両者ともに文化財の思いや願いを十分に探究することで、環境問題や平和

問題とつなげESDの効果が高まっていた。思いや願いを追究していく学習内容が大切であり、さらに十分な追究のために、「問い」を設定していくことが重要であると伺えた。両者において行動化はできているものの、参加・参画へのつながりが弱かった。行動化をさらに充実させることで、ESDとしての持続可能な社会づくりに参加・参画する態度を育むことにつながるだろうと考える。充実させる方法の一つとしてゲストティーチャーとの協働が考えられる。どちらもゲストティーチャーについての活用についての工夫は紹介されているものの、その効果については詳しく説明されていない。ゲストティーチャーの活用が行動化を進め社会参画につながると考えた。

5. これからの文化財学習の方向性

歴史文化遺産を通したESDの研究の第一人者である中澤(2021)は「歴史文化遺産が示す持続可能な社会づくりの必須条件」として「国際交流・国際協力」、「技術革新・新システムの導入」、「能動的に参加・参画する市民の存在」を提唱し、古都奈良の文化財を例に説明している。中澤のいう歴史文化遺産とは、世界文化遺産を包含するものであろう。

「国際交流・国際協力」に関しては、古都奈良の文化財が国際交流・国際協力によって造ることができたことを紹介し、当時の国内の技術水準では生み出すことができない高度なものを造ることができた感動が、後世まで伝えていこうという原動力となると説明している。「技術革新・新システムの導入」に関しては、新しい建築技術や様式を積極的に導入したことが寺社仏閣の1300年間の持続性をもたらしたことや、狩猟や樹木伐採の禁止という社会システムを導入したことで春日山原始林の原始性が持続したことを説明した。「市民の能動的な参加・協力」に関しては、東大寺の大仏の造立や、大仏殿焼失後の復興に多くの人々が参加・協力した点を指摘し、造立・復興において、中心にあるのは「無名の人々の参加と協力」であったことを強調した。聖武天皇や重源上人、公慶上人などといった、造立・復興を牽引した優れたリーダーの存在も重要であるが、彼らの考えに賛同し寄付や労働力を提供した市民がいたからこそ、大事業が可能となり現在まで持続していると説明している。さらに、「歴史文化遺産が示す持続可能な社会づくりの必須条件」を学ぶことが、持続可能な社会づくりを考える起点となり、そこから持続可能な社会の実現のために、今自分にできることは何かを考える契機となる学習をつくりることができる可能性を示唆している。持続可能性という観点でとらえESDにつながる中澤の考え方は、これからの文化財学習の新しい方向性であると考えられる。なぜなら、これまで文化財について学ぶ時、知識理解を中心に学んできたからである。これは地域に対する誇りや愛

着を育てることには一定の効果があったと考える。しかし、学習指導要領に新たに書かれた「持続可能な社会の創り手」を担おうとする態度を養う学習にはつながらない。中澤(2021)が提唱する「歴史遺産が示す持続可能な社会づくりの必須条件」のなかの「市民の能動的な参加・協力」から社会参画の重要性を学習に取り入れていくことが大切であると考え。実際に長友・中澤(2021)らは奈良に来る修学旅行生や、県内の校外学習で訪れる中高生に、「SDGs 学び旅」として古都奈良の文化財から SDGs 学習プログラムを創出し ESD 実践を行い、参加した学生が地元に戻り「自分たちができること」を行動に起こす効果をあげている。しかし、このような考え方は、まだ県内の小学校現場までは広がっていない。そこで中澤(2021)の「歴史文化遺産が示す持続可能な社会づくりの必須条件」を援用し、特に「市民の能動的な参加・協力」に焦点をあてた単元展開を作成し実践していく。

6. 授業実践

本実践において「市民の能動的な参加・協力」に焦点を当てるために「東大寺の大仏」を教材化した。先に述べた中澤(2021)の東大寺大仏の SDGs 学習プログラムを参考にしていく。中澤のプログラムでは、現地見学の前に行う 45 分間の講義の中で「市民の能動的な参加・協力」に焦点を当てるために、「続日本紀」「盧舎那仏造願の詔」の史実を用いた 3 つの学習を紹介する。

1 つ目は、聖武天皇の願いである「動植ことごとく栄えんことを欲す」の記載から、人間だけでなく生きとし生けるものすべてが栄える世の中にしたと願っていたことを SDGs の目標 14・15 と関連させて考える学習である。

2 つ目は、「一枝の草、一握りの土を持って像を助け作る」の記載から聖武天皇は大仏を造る際、為政者の権力で造るのではなく、市民の小さな力を結集して造るという方針で、多くの人々が協力した事実を学ぶ学習である。

3 つ目は、二度の戦乱による被災からの復興の際にも、聖武天皇の方針が大切に受け継がれ、無名の人々の参加・協力によって復興できたことを学ぶ学習である。これらの 3 つの学習を小学校 4 年生社会科「県内の文化財や年中行事」の学習展開に援用し単元開発を行った。

教材である東大寺の大仏は奈良時代を代表する文化財であり、小学校 6 年生社会科においては、すべての教科書で大仏造立について取り扱われている。教材の重複を厭わず 4 年生の学習で教材化したのは、5 章で紹介したようにこの東大寺の大仏が「市民の能動的な参加・協力」に焦点を当てるに相応しい教材と考えたからである。また田淵(2011)が「世界遺産のある地域では、あまりにも身近すぎて、優れた文化的な価値があっても、学

習者がそれを『当たり前』と捉えてしまうことになるのである。『当たり前』と捉えることは、そのことについて考えないことを意味している」と指摘しているように、奈良の子どもであろうとも東大寺の大仏は地域に当たり前にある文化財の一つとして認識しており、その価値について深く理解しているとは思えないからである。

中澤の「市民の能動的な参加・協力」に焦点をあてた単元展開を本授業に組み込むために、「問い」に注目した。中澤(2021)は、ESD が社会のあり方や自分と社会の関わり方に関する人々の価値観と行動変革を促す教育とし、ESD において概念的知識や、価値的・判断的な知識の獲得を目指した「問い」が重要であると説明している。そして概念的知識や、価値的・判断的な知識が獲得される学習の場面は対話的な学習場面としている。そこで奈良教育大学近畿 ESD コンソーシアムで推進している大西浩明の ESD の単元構想図の理論を取り入れた。大西(2021)は、ESD の単元構想図とは具体的な授業をイメージして、子どもが発言するであろう言葉や、もつであろう思いなどをマップ化して、子どもの思考を中心に学習の流れを表現したものと説明している。問いをメインにカリキュラムを作成することで、問いの質を高め探究的な学びを深めていくことができると指摘し、単元を構成する重要な 3 つの問いをつくることを推奨している。1 つ目が「これを解決することで単元の目標を達成できる中心課題であり、いわば単元の核となる問い」である。本実践では「奈良の大仏さまはどうして作られたのだろう？」に設定している。2 つ目は、単元の核となる「問いの解決を図るために、調べて分かったことをもとに深めるための問い」である。これは「大仏さまが問いかけるものと『世界中が取り組む SDGs』とに、つながりがあるのか？」と設定した。3 つ目は、「単元の目標を達成した後に発展的に考えるための問い」である。ここを行動の変革を促す問いと考え、「私たちは SDGs のどの項目の達成に貢献できるのか、地域課題に何ができるのか？」と設定した。大西が説明するように単元構想図は実際に授業を進めていくと、構想した通り進まないこともある。ポートフォリオや授業での発言を授業後に加え修正していきながら、実際に行った授業展開図として完成させていった。

(1) 日時及び授業学級

令和 4 年 1 月～令和 4 年 2 月
第 4 学年、子ども 30 人

(2) 単元名 教科

社会科 「東大寺の大仏が語る SDGs」

(3) 単元目標

- ・大仏造立は聖武天皇や人々の様々な願いがこめられ、その願いが復興においても大切に受け継がれてきたことを知り、またその願いはSDGsともつながることを理解することができる。

(知識・技能)

- ・大仏の造立や復興に協力した利他的な行動が後の時代の人々に引き継がれていることを考え、地域の人々に伝えることができる。

(思考・判断・表現)

- ・大仏造立の願いを自分事化し、大仏造立や復興という大きな目標達成のために、献身的に参加した人々の行動にあこがれ、現代社会の大きな目標であるSDGsや地域課題の解決に向けて自分たちができることを考え行動する。

(主体的に学習に取り組む態度)

(4) 学習展開の概要 授業時数 全7時間

7. 授業実践の考察

本章では、次の2点から成果を考察していく。1点目は、実践前後に行ったアンケート調査、2点目は、実践のなかで生まれた子どもの行動変容についてである。

7.1. アンケート調査を通じた価値観の考察

実践前後にアンケート調査を行った。アンケートは「はい」、「いいえ」の2項目で答えさせ、選択した理由も記述させた。

まず質問①「文化財について興味がありますか」についてである。結果として、実践前に文化財に興味のある子どもは19人であったが、実践後には28人と変化した。理由を見てみると「様々な願いがこめられていることに驚いたし、昔の人と同じようにつなげていきたい」「市民の寄付で大仏を造ったのがすごい」「SDGsとのつながりがあることを知らなかった」など、大仏にかかわる願いを探究したことで知り得た新たな価値に対する驚きの記述が多かった。平城小学校がある地域は、田園風景が広がる住宅地ではあるが、大型古墳や寺社仏閣、瓦窯跡などが点在していて、身近に文化財がある環境である。しかしながら、文化財があることが当たり前であり、興味のない子どももいる。そのような子どもにとって大仏を教材にして、「文化財にこめられた様々な願い」を知り、現代のSDGsとつなげる学習は、文化財を自分事化する契機となったのだと考える。変化しなかった2名の記述からは、大仏については興味が高まっていたが、地域の文化財への興味へと繋がらなかったことが確認できた。子どもの思考に応じた意見交流の設定や個別に對話する場をつくり、他の文化財についての興味をもたせて子どもの視野を広げるような学習を丁寧につくる必要があったと考える。

次に質問②についてである。子どもの持続可能な社会づくりへの態度を見るために「地域をよくしていこうとする活動に参加したり、自分たちで行動したいと思いませんか」という質問を実践前後に調査したものである。結果として、実践前は6人であったが、実践後には27人と変化した。その理由として、「一人ひとりの小さな力を集めて大仏づくりという目標を達成したように、私たちも地域課題やSDGsに協力したい」など、学習展開のなかで持続可能な社会づくりに向けた市民参加を学んだこと、実際に行動したことで、社会参画への気持ちが高まっていった記述が多かった。特筆すべきことは、大仏を復興した市民の行動にあこがれた記述だけでなく、現在もそのような考え方を大切に行動している東大寺僧侶である清水公仁氏の生き方にあこがれ行動化への気持ちを高めた子どもの記述を確認できたことである。清水氏がゲストティーチャー（以下、GTと表記する）として紹介してくれた「動植ことごとく榮えんことを欲す」

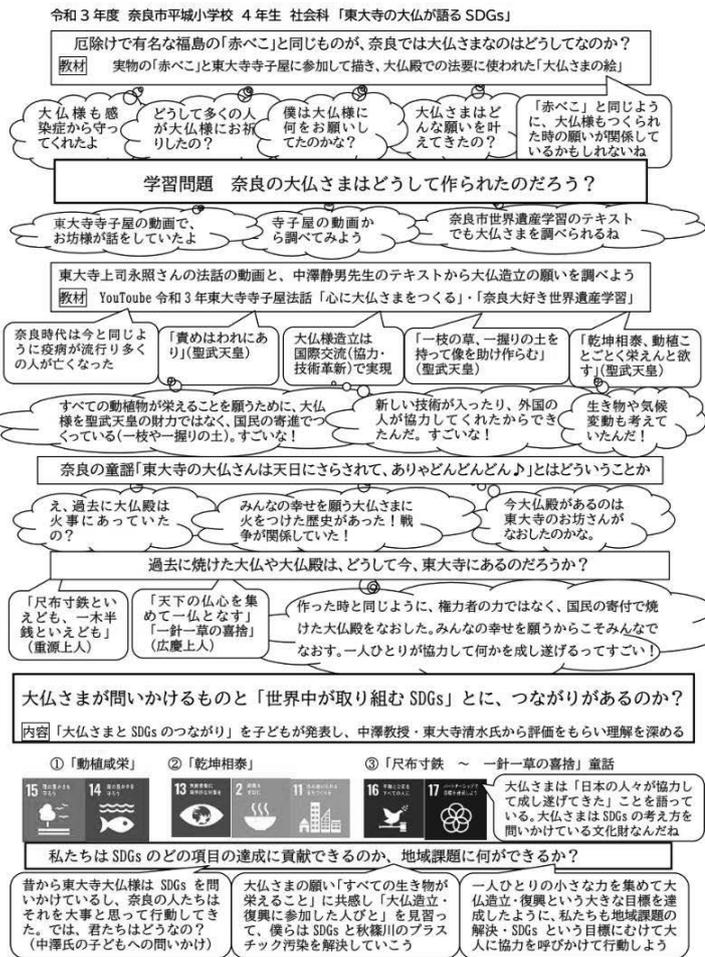


図 1 授業展開図

などといった考えを大切にされた生き方や、日々のお勤めや修二会に参加する行動化へのあこがれから、「清水さんのように、すべての生き物が幸せに生きられる世界のために自分も SDGs のなかで、できることをしたい」という記述につながったと考える。新宮・中澤 (2020) は ESD として行動化を促す単元開発では GT から探究を評価してもらう活動と GT の営みを知り、あこがれる活動の重要性を述べている。本実践においても、学習問題について考えたことを清水氏に評価してもらう活動や、大仏造立や復興に向けて積極的に行動した当時の市民の行動にあこがれる活動を生み出したことで、自分たちも現代の目標である SDGs の達成や地域課題の解決に向けて行動してみたいという考えが生まれた。また、現在においても SDGs とつながる大仏づくりの考え方を大切に行動している清水氏の営みを知り、あこがれることは行動化を促すことに効果があった。変化が見られなかった 3 人については、欠席により大仏づくりや復興した市民参画の調べ学習に参加できていなかったり、清水氏の話を直接聞くことができなかったことで、市民や清水氏の営みにあこがれることができなかったことが原因の一つではないかと考える。意見交流や補講などでも、営みにあこがれる学習をつくっていく必要があった。

これらを門脇の「社会力」の視点から考察する。門脇 (2005) によれば、社会力とは「人が人とつながって社会をつくっていく力、あるいは社会の運営に積極的に関わっていく力であり、同時に、より良い社会をつくっていくという意志や意欲であり、そのような社会を考える構想力であり、実際にその考えを実現・実行できる資質能力」と述べている。新宮・中澤 (2021) は「門脇の社会力は、ESD で求めたい資質・能力と通底しており、持続可能な社会を実現しようとする基盤となるものである」と整理している。門脇 (2002) は、子どもの社会力の有無を見極める分岐点として、「地域で行われるさまざまな活動にも積極的に参加し、可能なら、進んで企画や運営にもかかわっていくこうとする態度となってあらわれてくるはず」と述べている。つまり、本実践を行うことにより子どもの社会力が強化され、ESD としての求めたい資質能力も高まったと考えられる。

7.2. 実践で生まれた子どもの行動変容

ここでは 2 つの変容を述べていく。1 つ目はライフスタイルの変革についてである。実践後に、子どもが家庭で SDGs の目標に向けて達成するための行動宣言をし、2 週間の行動記録をつけた。12 日以上行動することができた子どもは 26 人であった。最も多く行動した目標は、目標 14 の「海の豊かさを守ろう」と目標 15 の「陸の豊かさを守ろう」のどちらも 14 人であった。これは、4 年生の総合的な学習の時間で通年学習している河川のプラスチック汚染の解決に向けた行動化とのつながりで

あった。「なぜその目標の行動をしたのか」の質問調査をすると、「大仏さまが全ての生き物が暮らせる社会を願っていたことに感動し、自分のできることをやった」と答えた子どもが 4 名いた。大仏造立の願いを知ることが行動化につながったとも考えられる。次に多かったのが、目標 13 の「気候変動に具体的な対策を」の 11 人であった。節電や無駄な買い物をしないなど、子どもが行動化しやすい面もある。質問調査をすると、「東大寺の大仏の願いに気候変動についての願いがあり、自分ができることを考えて行った」や「天候に恵まれることを願う東大寺の修二会に参加して、夜を徹してお祈りする僧侶の清水さんのように自分にもできることをした」と答えていた。若干名だが目標 2 「飢餓をゼロに」、目標 3 「すべての人に健康と福祉を」について行動した子どもも、大仏さまの造立の願いをもとに行動していた。

筆者は、これまで SDGs の達成に向けて子どもに行動化を促すために、地域課題から行動化につなげてきた。本実践でも、文化財の持つ持続可能性や SDGs との関連を単元に取り入れることで、ライフスタイルの変革の入口となるような行動化につながることを確認できた。

2 つ目は、地域課題についての子どもの社会参画である。例年平城小学校 4 年生は、秋篠川のプラスチック汚染について探究し、ゴミ拾いと分析からその原因が大人にあることを明らかにし、大人に協力要請をして行動化につなげている。学習参観で見られた子どもの大人への協力要請について紹介する。令和 3 年度は、東大寺の大仏の事例をあげて大人に協力を要請したスピーチが生まれたので、一部を紹介する。

大仏がそれから 1300 年の間で何度か焼けてしまったけどそれでも、奈良の人々が、「すべての生き物が栄えることを願う」大仏さまの考え方を忘れてはならないと、また小さな力を集めて大きな大仏をつくったそうなのです。だから奈良は SDGs のような、すべての生き物が幸せに生きられるような持続可能な社会づくりの考え方を 1300 年間大切に文化があるのです。そんなことを知ると、私たちも奈良の人だからこそ、平城地域のプラスチックごみ問題の解決から、世界の SDGs の達成に貢献していく、海のプラスチックごみ問題の解決を目指せるはずと考えています。私たちも奈良から動いて未来を変えていきましょう。(2022 年 2 月 10 日学習参観での子どもの発表より)

大人に協力要請をすることは、子どもにとってはハードルが高い。新宮・中澤 (2021) は、実践のなかで環境活動家グレッタ・トゥーンベリンの大人への協力要請をする姿を紹介し、その生き方にあこがれるなかで大人への協力要請を促してきた。令和 3 年度はグレッタ氏の代わりに、鹿児島県屋久島町の小学校とオンライン学校間交流をし、お互いに大人に協力要請を促していくことを話し合いで決めていった。その際、平城小学校の子ども

から屋久島の子どもに伝えたのは、大仏造立や復興に積極的に参加した市民参画の重要性であった。

以上のような実践で生まれたライフスタイルの変革の入り口となるような子どもの行動化は、ロジャー・ハート(2000)の「参画のはしご」理論における7段階目にあたる。さらに最終的に大人を巻き込もうとする行動の原動力になったのが、地域にある大仏という文化財を通して学んだ市民参画の重要性と、GTへのあこがれである。これがロジャー・ハートの「参画のはしご」における最高段階の8段階に近づいているといえるだろう。残念ながら、コロナ禍により大人と協働解決するような集団をつくることはできなかった。

8. まとめ

本稿は、小学校社会科「県内の文化財や年中行事」の単元をもとに、文化財を活かすことで持続可能な社会づくりを考える起点とし、そこから持続可能な社会の実現のために、いま自分にできることは何かを考える契機となる小学校におけるESD社会科を新たに創出するための方法を考察したものである。

文化財を活かした小学校におけるESD社会科は、これまでの文化財で学ばれてきた知識理解の学習にとどまらず、文化財がつけられた当時の人々の思いや願いに着目し、文化財の保存・継承のための努力や工夫を追究し、文化財の価値を見直す学習である。このような実践によって、持続可能な社会の条件やそのために必要な市民参画にあこがれて、SDGsの達成に貢献することに発展するような価値観の転換と行動化を促すことができる。

ここで創出された小学校におけるESD社会科の授業実践を通して明らかにできたことは、次の2点である。

第1点は、これからの文化財教育の方向性として、中澤(2021)の「歴史文化遺産が示す持続可能な社会づくりの必須条件」を取り入れたESDは、先駆的であり極めて有効である。

第2点は、中澤(2021)の「歴史文化遺産が示す持続可能な社会づくりの必須条件」の「市民の能動的な参加・参画」の視点を「県内の文化財や年中行事」の授業に取り入れ、探究することやSDGsと関連づける学習につなげることは、子どもの積極的な市民参画へのあこがれを生み出し、SDGsの達成に向けて行動を喚起し、また地域課題に対して子どもの参画を促す小学校におけるESD社会科の一実践となると考える。

注

- 1) 文部科学省(2008), 小学校学習指導要領解説社会編, 東洋館出版社, p.41
- 2) 文部科学省(2017), 小学校学習指導要領解説社会編, 日本文芸出版, p.66

- 3) 文部科学省(2017), 小学校学習指導要領解説社会編, 日本文芸出版, p.62
- 4) 文部科学省 日本ユネスコ国内委員会(2018), ユネスコスクールで目指すSDGs 持続可能な開発のための教育, p.5
- 5) 文部科学省(2017), 小学校学習指導要領解説社会編, 日本文芸出版, p.65
- 6) 中澤静男(2021), 学校教育におけるSDGs・ESDの理論と実践, 奈良教育大学ESD書籍編集委員会, p.41
- 7) 田淵五十生(2011), 世界遺産は可能かーESD(持続可能な開発のための教育)をめざしてー, 東山書房, p.42
- 8) 田淵五十生・中澤静男(2007), 「ESDを視野に入れた世界遺産教育ーユネスコの提起する教育をどう受けとめるかー」 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要第16巻, 奈良教育大学, p.65
- 9) 中澤静男(2021), ESDの授業づくり, 京阪奈情報教育出版, p.27
- 10) 田淵五十生(2011), 世界遺産は可能かーESD(持続可能な開発のための教育)をめざしてー, 東山書房, p.35
- 11) 長友恒人・中澤静男・大西浩明(2021), 奈良SDGs学び旅, 奈良新しい学旅推進協議会
- 12) 中澤静男(2021), 「東大寺」, 奈良SDGs学び旅ガイドブック, 奈良新しい学旅推進協議会
- 13) 新宮濟・中澤静男(2020), 「ESDとして行動化を促す単元開発」 奈良教育大学次世代センター研究紀要第6巻, 奈良教育大学
- 14) 中澤静男(2021), 学校教育におけるSDGs・ESDの理論と実践, 奈良教育大学ESD書籍編集委員会, p.50
- 15) 大西浩明(2021), 学校教育におけるSDGs・ESDの理論と実践, 奈良教育大学ESD書籍編集委員会, p.66
- 16) 門脇厚司(2005), 社会力が良くわかる本, 学事出版, p.24
- 17) 新宮濟・中澤静男(2021), 「河川におけるプラスチック汚染を解決しようとする子どもの変容を促す要因についての考察」 奈良教育大学次世代センター研究紀要第7巻, 奈良教育大学, p.77
- 18) 門脇厚司(2002), 学校の社会力, 朝日新聞社, p.15
- 19) ロジャー・ハート(2000), 子どもの参画, 萌文社, p.42 ロジャー・ハートは子どもの様々な社会参画の形態を8つの段階に分け「参画のはしご」として整理している。下段の3段が「参画とは呼びがたいもの」であり4段目以上を「本物の参画」としている。「大人と子どもが同時に参画する」ことを理論の中心に置き、プログラムを通して社会的に力のある大

人とともに活動することの重要性を説いている。

参考文献

及川幸彦・大牟田市 SDGs・ESD 推進委員会（2021），「理論と実践でわかる！SDGs/ESD 一持続可能な社会を目指すエネスコスクールの取組」，明治図書出版衆議院ホームページ，衆議院，「法律第二百十四号（昭二五・五・三〇）文化財保護法」，https://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_housei.nsf/html/houritsu/00719500530214.htm，2023 年 1 月 29 日。
中澤静男・田淵五十生（2008），「地域学習としての『世界遺産教育』」，奈良教育大紀要，人文・社会科学第 5 巻
中澤静男・田淵五十生（2008），「地域学習としての『世

界遺産教育』」，奈良教育大学紀要，人文・社会科学
中澤静男・田淵五十生（2006），「奈良における世界遺産教育 —シルクロードの文化を中心に—」，奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要，第 15 号
長友恒人・中澤静男・大西浩明・杉山拓次・川井徳子（2021），SDGs 学び旅ガイドブック，奈良新しい学旅推進協議会
東大寺公式チャンネル・Todaiji Temple Official Channel: 主催 華嚴宗大本山東大寺・協力 奈良教育大学近畿 ESD コンソーシアム，令和 3 年東大寺寺子屋法話「心に大仏さまをつくる」，<https://www.youtube.com/watch?v=vSPCdVE58OU>，2023 年 1 月 10 日。
宇治谷孟（2019），続日本紀（上）（中），講談社学術文庫
門脇厚司（1999），子どもの社会力，岩波書店
門脇厚司（2010），社会力を育てる，岩波書店

